

令和8年度第2回学校運営協議会 記録（概要版）

日時： 令和8年9月14日（月） 15:15～16:45

場所： 北海道真駒内養護学校 会議室



1. 開会式および全体概要

(1) 学校長挨拶

- ・開会と感謝の表明：ご多用の中、ご出席いただいた委員および関係者の方々へ感謝を申し上げた。前回の会議以降、各学部での宿泊行事や、北海道主催の体育大会・ボッチャ競技大会への高等部全員参加など、児童生徒が大きな成果と盛り上がりを見せた取り組みを報告した。
- ・本校の学習状況とご参観の案内：今後は学習発表会をはじめとする学習的行事の時期を迎えるため、校内掲示物や日頃の学習成果を発揮する児童生徒の姿をぜひご参観いただきたい旨を案内した。
- ・熟議への期待：教職員と地域関係者が「チーム真駒内」として一丸となり、地域連携の具体的な方策について正面から議論を深め、本校の教育活動における実効性のある取り組みへ結びつけることへの強い期待を示した。

(2) 日程説明・事務連絡

- ・スケジュール案内：2学期の主な学習活動の確認、生徒指導部からの「防災の取り組み」に関する報告、3グループ（A・B・C）に分かれた熟議、全体の交流会および閉会という一連の会議手順を案内した。
- ・個人情報保護等への配慮：広報掲載等における写真や個人情報の取り扱いに関する注意事項を確認し、記録上の固有名詞等は適切に保護する運用を共有した。

2. 生徒指導部報告：本校の防災の取り組み状況

生徒指導部担当者より、本校（肢体不自由特別支援学校）における安心・安全な環境づくりのため、以下の5つの柱に沿って報告を行った。

(1) 防災に関する目標

学校教育目標を踏まえ、生徒指導部内の「防災対策委員会」を中心に「学校生活を安全に過ごす態度の育成および環境の整備に努める」ことを重点目標とし、日々の安全指導を展開している。



(2) 関係機関・部署との連携体制

生徒指導部をはじめ各分掌、学部・学年、寄宿舍、保護者、地域町内会、関係機関と多角的な連携体制を構築し、児童生徒の身体状況に応じた安全確保を徹底している。

(3) 今年度の具体的な取り組み

1. 年間4回の避難訓練：季節・時間帯・災害種別（火災・水害・地震・複合想定）を変えて実施し、課題を次回訓練へ反映させている。
2. 1日防災学校の実施：8月の地震想定訓練時に防災食試食や被災写真パネル展示を行い、防災意識向上を図った。
3. 引き渡し体制の構築：保護者連絡ツール（テトル）によるテスト配信や、来年度の引き渡し訓練導入に向けた教職員研修を開始した。

(4) 今年度の工夫点

- ・避難動作の柔軟化：避難場所を複数化して分散避難を可能にし、トランシーバーでリアルタイムの避難状況を把握・共有した。
- ・多様な引き渡しパターンの想定：保護者の直接送迎に加え、「福祉サービス事業者（放課後等デイサービス等）」による送迎を想定した検証を導入した。

(5) 次年度に向けた課題と展望

- ・避難シナリオの改善：多様な災害へ柔軟に対応するため、避難手順の簡潔化・平易化を進める。
- ・引き渡しシミュレーションの検証：事前検証では10名の引き渡しに約20分を要したため、全校生徒（約120名）への対応には時間の短縮が大きな課題となった。狭隘な敷地・交通条件を踏まえ、年間4回の研修を通じて手順の効率化を図っていく。

3. 熟議グループ別 詳細報告

【熟議概要】

- ・テーマ：本校（小・中・高）の教育活動の現状と課題の共有
および地域・関係機関との連携・「マコヨウキラキラ大作戦」の具体化
- ・構成：グループA：教職員、社会福祉協議会、身体障害福祉会、地域団体 等
グループB：教員、PTA 会長、大学関係者、近隣町内会長 等
グループC：教員（主事・学年主任等）、校長、副校長、歯科医師 等



【熟議グループA】 地域資源・関係機関との実効性ある連携の可能性

(1) 協議の目的および背景

本校の小・中・高一貫した教育体制を強みとして捉え、学校全体としての「一体感」を持ちつつ、児童生徒が生き生きと活動する姿を外部へ効果的に発信する方法を模索した。現場の実態に即し、実現可能で実践的な取り組みへと議論を整理した。

(2) 各学部の現状と課題

- ・小学部：家族以外の大人と関わり「世界を広げる」ことや学習習慣化が重点。水遊び等の活動には人手（ボランティア等）の確保が課題。
- ・中学部：キャリア教育（進路学習）による将来像のイメージ形成が重点。校外学習等における地域・他校との「狙いのマッチング」が課題。
- ・高等部：作業学習や販売学習を通じた「働く力」や自己有用感の育成が重点。地域からのフィードバック不足や卒業後の「余暇の過ごし方」の支援が課題。

(3) 地域資源（社協等）の視点と提案

社協が持つ町内会やボランティア等の地域ネットワークを活用し、学校のボランティアニーズや余暇支援と接続する方向性を検討した。

(4) 具体的アクションプラン

- ・循環型地域連携：メッセージボード設置や社協広報誌の活用により、地域からの感謝を生徒に還元する。
- ・相互にメリットのあるマッチング：事前協議により、受け入れ側にとっても障害理解が進む企画を推進する。
- ・ボランティアインフラの活用：社協ボランティアセンター等と連携し、活動補助人材を育成・確保する。

【熟議グループB】 日常の授業・児童生徒会活動と外部人材の活用

(1) 開会と重点テーマ

単発のイベントに終わらせず、日常の教科指導に地域連携を組み込むことを主眼とし、以下の3テーマを軸に協議した。

1. 日々の授業の充実と児童生徒の主体的な関わり
(準備・進行等の役割作り)
2. 地域資源・外部人材を活用した体験的学びの広がり
3. 継続的・双方向なコミュニティの構築(双方への還元関係)



(2) 各学部での実践報告

- ・小学部：児童会専門部活動(図工・体育・音楽)やプロダンスチーム招集、大手企業による食育出前授業の導入。
- ・中学部：区役所から本物の記載台・投票箱を借り受けての主権者教育(役員選挙)、外部講師による文化・国際理解学習。
- ・高等部・全校：隣接校との共同植栽、近隣店舗からの軽作業受託および納品学習、地域インフラを活用した校外学習。

(3) 具体提案：プロピアニストを招いた「手作り参加型コンサート」の授業化(案)

PTA会長からの提案を受け、単なる鑑賞会ではなく「授業(カリキュラム)」として展開するプロセスを構築した。

- ・事前学習：音楽科等でリクエスト曲を選定し、司会・装飾などの運営チームを結成。
- ・会場づくり・準備：ピアノを360度囲む座席配置の設営、招待状作成、進行リハーサル。
- ・本番・交流：生徒の司会進行による演奏体感と感想の交流。

(4) 今後の展開

PTA会長と日程や企画の最終調整を行い、学校側は教育課程(行事・授業コマ数)へのスムーズな組み込みを進める。

【熟議グループC】 「マコヨウキラキラ大作戦」の具現化と地域・進路の構造的整理

(1) 基本姿勢と3大キーポイント

多様な立場からアイデアを出し合い、一貫した教育課程の中で着手できる具体策を見出すことを確認した。

- ・大人ができることの創出(教員・保護者・地域・専門職の連携環境)
- ・楽しい授業づくりの推進(魅力的で主体的な学びの創出)
- ・子どもたちに目を向けることの徹底(個々の実態と成長の変化への対応)



(2) 「地域」の構造的整理(2つの軸)

熟議を通じ、本校における地域連携を以下の2軸に整理して捉えた。

地域の分類	対象エリア	連携の意義・主な活動
【軸①】 学校が所在する地域	真駒内・南区周辺	日常の作業学習、花壇づくり、店舗利用、地域の見守り環境
【軸②】 児童生徒が生活する居住地域	札幌市内各区および市外	卒業後の生活拠点、余暇活動、居住地校交流、民生委員との繋がり

(3) 専門職（医療関係者等）の活用とまとめ

歯科医師等の専門知識（摂食指導や歯磨き指導等）を学校現場へ還元することや児童生徒の「できた！」という成功体験を増やすことなどが話題となった。多角的な意見を教育課程と地域軸のポートフォリオに可視化し、次年度へ向け着手可能な施策から実行に移していく。

4. 閉会式

(1) 熟議成果の交流

各グループ代表者より熟議内容が報告され、全委員・教職員で共有した。

- A：ボランティア活用・感謝の還元
- B：参加型コンサート等の授業化
- C：地域の2軸整理・専門職連携



(2) PTA 会長挨拶

保護者および会社経営者の視点から、地域・企業の教育リソース活用の有効性を強調された。本日の会議中に地元の有名製菓会社から「出張授業やお菓子作り体験の検討」に関する前向きな返信を得たことや、車椅子のデコレーションコンテスト、作品展示を通じた魅力発信など、実現に向けた強力な支援と期待の言葉が寄せられた。

(3) 学校長挨拶（主催者まとめ）

本日は多用の中、本校主催の学校運営協議会ならびに熱心な熟議にご参加いただいたことに深く感謝する。主催者として今後の本校の方針を述べる。

各グループの発表を通じ、本校の教育活動や児童生徒の姿を「外部へ発信・アピールする取り組み」をさらに強化する必要性を痛感した。小・中・高一貫校としての丁寧な教育を基盤としつつ、今後は地域へ出向く機会や、地域の方々をお迎えする機会をより一層増やしていく考えである。

お菓子作り体験やプロのコンサート、ボッチャ交流などを通じ、子供たちの生き生きとした活動を見ていただくことが地域からの理解と認知につながり、将来の社会参加を支える基盤となる。

本日いただいた素晴らしいアイデアを一回限りのイベントで終わらせず、本校の教育課程へ確実に組み込んでいく。「双方にメリットがある地域・企業との社会還元型連携」を目指し、「チーム真駒内」として教職員一丸となって取り組んでいくため、今後とも変わらぬ支援と協力を願う。